

令和2年度 学位授与式

令和2年度は大学生活にとっては、対面のないことが日常になった1年間でした。学生はじめ巷には怨嗟の声もありますが、やれることにチャレンジするという点では、オンラインと非対面によってどれくらいできるかの挑戦の1年であったように思います。実際、令和2年度の冒頭では決してメジャーだったとは思えないZoomやTeamsが、年度途中からはそれらを扱えることが当然のPCリテラシーになり、通勤・通学などの移動に吸い取られていた時間や体力に改めて気づかされました。年度中盤以降では、“えっ、これ対面でやるのですね?!”と、確認することのほうが普通になってきた気がします。

さて、大学としての大学共通テスト以外での対面的な行事はほぼ実施しない方針に基づき、大学全体での卒業式・修了式は行われませんでした。学位記授与式は、昨年度に引き続き、各EP・ユニット毎で実施されました。実施にあたっては、【1度に50名以上の人数を集めない】、【できるだけ短時間】、【人の動く動線を設定する】の徹底ということで、卒業生34名、修了生23名(博士課程後期2名を含む)が、午前と午後の時間帯に分かれ、座席指定、学位記は代表者のみが直接授与という形式での学位記授与式となりました。



図：(左) 学位記などは座席ごとに事前配布、(右) 代表者のみが学位を直接授与

また卒業生・修了生以外の参加の禁止に加えて祝賀会等の自粛の強い要請もあり、今年も学位授与式での弘陵造船航空会会長による祝辞、同主催の祝賀会については見送りとなりました。

午前中に実施した学部卒業生の学位記授与式では、開会の辞に続き、代表者への学位記授与がEP代表の日野教授により行われました。学位記授与に続き、日本船舶海洋工学会奨学褒賞、日本航空宇宙学会賞学生賞、弘陵造船航空会賞、船舶海洋工学賞がそれぞれ1名ずつに贈られました。

各賞の授与に続き、教室主任の岡田教授から式辞が述べられました。式辞では竹澤誠二先生が使われた【逆風操帆】を引用しつつ、「普段順調なときは気が付かないが、困難に直面した時初めてその人の真価が現れること、また、卒業生の順風満帆の未来への期待とともに、逆風下にさらされることがあっても、ただ嘆くのではなく、為すべきことを為し、困難を变革の機会に変える心を持ってほしい」というメッセージを伝えられました。

式辞の後、閉会の辞をもって、学部卒業生の学位記授与式は15分弱で終了し、卒業生は

学位記を手に速やかに船舶海洋工学棟玄関に移動し、記念撮影をもって解散となりました。

大学院修了生の学位記授与式は午後 3 時から行われました。会の流れは卒業生の学位記授与式に準じたもので、司会は大学院教務委員の宮路准教授、学位記授与はユニット長の岡田教授が行った。授与式は 10 分程度で終了し、記念撮影後解散となりました。

この 1 年、キャンパスに来ることがほとんどなかった・あるいは限られた場所・時間帯しか大学での滞在が許されなかった多くの卒業生・修了生にとって、学位授与式では本当に 1 年ぶりに対面で声を交わした卒業生同士も多かったと思われます。そんな 1 年ぶりの対面での再会となった学位授与式においても、終了後の速やかな解散の要請はなかなか辛いものがありました。本教室で学んだ知識や培った人間関係をフルに活用しつつ、社会人として飛躍してくれることを願いますとともに、今年卒業した同期が屈託なく集まり、ワイワイと語らえる機会が訪れるよう、同期のつながりを保ち続けてくれることを心から思います。



